

子どもの造形における塑造制作について①

- 川崎市保育会「造形班」研修会での実践を中心に -

なか はら あつ のり
中 原 篤 徳

〈要 旨〉

本稿では、子どもの造形における塑造制作について、これまでの筆者の取り組みを振り返り、具体的な造形方法、その意味内容を改めて考えていくこととした。塑造制作には長い歴史があり、明治期に受容された西洋式の塑造は、幼児教育の最初期に取り入れられた経緯がある。しかしながら、今日、保育・幼児教育の分野で、粘土による塑造は、造形活動の中で主流とはいえない状況となっている。そこで、塑造制作そのものについて考え、また、筆者が研修会の講師を務めた一般財団法人川崎市保育会特別対策委員会「造形班」での実践的な研修内容から、保育者による塑造制作における援助の仕方、制作の意義について考察した。また、「造形班」による研究発表や、これまでの研修の中での保育者の意見、感想等から、保育現場において触覚や皮膚感覚に訴える塑造制作によって、造形活動がより充実する可能性を見出すことができた。また、保育者と子どもの思いが共鳴する造形内容を、塑造は持っていることが改めて理解され、今後、実践の中での具体的な造形の援助の仕方について研究していくこととした。

〈キーワード〉

子どもの造形 塑造 粘土 共感 研修

I. はじめに

本学で専任教員として造形の科目を担当して10年が経ったが、授業では様々な造形技法を取り上げながら子どもの造形について筆者自身考えてきた。筆者が専門とする塑造分野については、1年次の「子どもと造形表現I」では紙粘土や石粉粘土によるオーナメントの制作(図1)、ゼミにおいては、「塊」をテーマに土粘土による塑造制作(図2)を行ってきたが、それを保育現場で活かしていく具体的な方法については、筆者が所属する日展で行ってきた「One Day Art(ワン・デー・アート)」¹⁾や「親子鑑賞教室」²⁾において、実際に幼児、児童、生徒に塑造を指導する中で検討し



図1. 彩色したオーナメント



図2. 塊感を表現した彫刻

てきた。また、筆者のゼミ生であった卒業生数名と、土粘土による幼児造形の可能性を探って勉強会を行ってきた経緯もある。

さて、子どもの表現について、保育所保育指針、幼稚園指導要領では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」³⁾としている。この指針、要領に従って塑造制作について考えるとすれば、塑造は、粘土による造形のため、押さえる、つまむといった行為がただちに形態として反映されることが特徴であり、「自分なりの表現」へと繋がりやすい表現方法といえることができる。また、制作の経験を積む中で素材やモチーフへの多角的な理解が進み、作るということへの意識が高まる中で、美的感性が育まれ、創造性が涵養される期待がある。指針、要領は、表現全般に渡る普遍的な意義を示しているわけであり、この普遍的意義に合致したものとして、かつて多くの幼児教育・保育

現場において粘土による造形表現の時間が確保され、絵画表現だけではない彫刻的な表現が活動の中で取り入れられてきたのであろう。

しかし、現今の状況としては、幼稚園、保育園の教員、保育士の方々と話をしている中では、活動と活動の合間に油粘土による制作を行うといった言わば脇役的な立場となっており、造形のメインの活動に明確に位置づけられているようには感じられない。そこで、本稿では、筆者が過去5年間に行ってきた子どものための塑造のワークショップ、殊に川崎市保育会「造形班」における塑造制作の研修を振り返り、保育現場や幼児教育の現場からやや遠ざかりつつあるように思われる塑造の意義と可能性について考え、子どもの造形の中で塑造制作を位置づけることを試みていきたい。なお、本稿は全3部の実践研究の①として論考していくものである。

Ⅱ. 塑造制作について

1. 塑造とは

「塑造」という言葉自体が、そもそも聞きなれない言葉であるが、その意味は、可塑性のある素材によって造形することを意味する。可塑性とは、変形しやすい性質を表す言葉である。中村傳三郎(1916～1994)の『明治の彫塑』⁴⁾によれば、「塑造」は明治初年に美術史家の大村西涯

(1868～1927)によって「彫塑」という言葉が作られた時から発生した語と考えられ、明治32年(1899)には、東京美術学校の彫刻科に塑造科ができ、その頃には一般的な用語になっていた。

我が国における塑造的な彫刻制作の歴史は古く、白鳳、奈良時代の乾漆(図3)、塑像、ブロンズによる仏教彫刻がその代表であったが、奈良時代後期からの一木彫の出現により、平安期以降、近世に至るまで造像は木彫が主流となる。前出の『明治の彫塑』によれば、明治以前は彫刻といった言葉もなく「彫縷」といった言葉で表され、仏教彫刻も建築彫刻も根付のような工芸的なものも全て含む語であったようである。

「塑造」という可塑性のある素材による造形、つまり粘土による造形とは、粘土の持ち味をそのまま生かした造形であり、それを石膏という素材に置き換え、さらにブロンズにするという、それまでの鑄造による仏像制作とは異なる新味のある表現技法であった。塑造は、石膏、ブロンズなどの材質を転換するものから、乾燥後に焼成して完成とするテラコッタなど幅広い表現を持つようになる。明治9年(1876)に工部美術学校においてイタリア人彫刻家ヴィンチェンツォ・ラグーザ(1841～1927)によって教授されたこの表現技法は、明治10年(1877)には東京女子師範学校附属幼稚園の保育科目の第三知識科の中に「粘土細工」として登場し、それ以降、幼児教育の中に塑造が取り入れられるようになる。このように、我が国における幼児の造形を考える時、幼児教育の最初期から塑造が存在していたことは改めてここに確認しておきたい。



図3. 五部浄像 奈良時代

2. 塑造のための素材・用具



図4. ①土粘土



②油粘土

塑造家の行う塑造制作と幼児の塑造制作には、基本的には差異はない。土粘土(図4. ①)もしくは油粘土(図4. ②)を用いて形作することは同じであり、その後の材質転換によって恒久的な作品にするかどうか異なるところである。もともと幼児の作品もブロンズのような素材に置き換えることは可能であり、そのような試みがなされても良い。

それではまず土粘土について詳しく見ていきたい。土粘土は陶土でもあり、主に木節粘土⁵⁾、蛙目粘土⁶⁾に黄土などを混ぜたものである。粘土の配合は、塑造家の好みもあり、様々であるが、概して昔のものは砂気の多い黄土色のものが多く、昨今のは灰色のことが多い。土粘土は、元々「土」を精製したものであるため、手足についた汚れは洗えば落ち、食しても毒性のあるものではない。特徴としては、適度な粘性と可塑性を持ち、水分が多ければ柔らかく、逆に少なければ固くなるものである。また、手や板で叩くことによって形が締まってきて質感に変化が出るのも特徴である。なお、柔らかい状態に保つためには水分を常に与える必要があり、濡れた綿布などで粘土を覆い、蓋つきの容器やビニール袋に入れておくことが望ましい。

一方、油粘土は、粘土(カオリン:ケイ酸アルミニウム)と植物性の油を混ぜて煉り合せたものであり、粘土の伸びは土粘土以上のものがある。ただし、固まりにくい性質、叩いても締まらない特性のため質感の変化を出すことは容易ではない。つまり凹凸に留まらない質感や量感の表現を行うには、やや難のある素材といえる。しかしながら、保存は簡単であり、外に出しておいてもすぐに固まることはない。こうした特徴から油粘土は、マケットなどのスケッチ的な塑造制作には適したものであり、塑造家の多くが土粘土の前段階の制作で用いている場合が多い。子どもの塑造においても多用されているが、独特の油の匂いから苦手とする子どもも多く、また単価が土粘土よりも高いことから、保育や幼児教育の現場では、弁当箱サイズの容器に入れられる量での造形活動が主となって、ダイナミックな造形に向かないものでもある。

この他に紙粘土、石粉粘土、樹脂粘土、小麦粉粘土など、幼児の塑造に用いる粘土の種類は多い。これらの多くが材質転換することなく、そのまま乾燥させて完成とする類の粘土になる。筆者が研修やワークショップで用いる粘土として軽量紙粘土(図6)が挙げられるが、この粘土は近年開発された、優れた特性を持つ粘土である。軽量紙粘土には2種類あり、パルプに有機微小中空球体(プラスチック製の微小な中空体)を混ぜたものと樹脂に有機微小中空体を混ぜたものがある。これまでの紙粘土に比し、非常に軽いものであり、ペットボトルや木材にも付きやすく、乾燥による割れやヒビも少ない。また、乾燥した粘土の上から、さらに柔らかい粘土を重ねて盛り付けることが可能であり、これも従来の紙粘土と異なる点である。しかし、あまりの軽さから、完成後の質量の軽さが見た目にも現れてしまう。故に質感の表現には十分適した粘土とはいえず、モチーフの本質的な特徴を表現するには難しい素材でもある。このように粘土には様々な種類があり、「作るもの」に合わせて粘土を選択することにより、充実した表現がなされるため、保育者は粘土を吟味する必要がある。



図5. 軽量紙粘土

次に塑造で用いる道具を見ていきたい。大学の彫刻科などでは、最良の道具は手であるなどと



図6. ① ② ③ ④

言われることが多いが、手がもっとも自由に動く道具であることに異論はないだろう。しかしながら、粘土を押さえる、窪みをつける、切り取る、付け加えるといった場合、手では充分ではないことがあり、道具を用いる。基本的な道具は、木ベラ(図6. ①)と呼ばれる木製の道具であり、形状にも大きさにも様々なものがある。また、鉄ベラ(図6. ②)という鉄製、あるいはステンレス製のものもあり、こちらは大型の塑造作品の

制作などに用いられることが多い。このヘラの形状は、明治期にイタリア、フランス、ドイツなどの西洋諸外国に、彫刻芸術を学ぶため留学した学生達によって請来されたものが元になっていることが多い。

筆者が在籍した筑波大学には、明治期にベルリンで学んだ新海竹太郎(1868～1927)⁷⁾が愛用した鉄ベラ一式が保存されているが、今となっては使い道の分からない形状のものもあれば、現在、日本で作られているヘラと同じ形状のものもある。こうした塑造用のヘラの他にも石膏取り用のヘラ(図6. ③)、材質転換した後、石膏を削ったり、盛り付けたりするためのヘラ(図6. ④)もある。幼児の塑造においては、プラスチック製のものが比較的主流のようであるが、吸湿性がないため、粘土への関与が形状の変化にのみ限定されてしまい、質感を表すのにはやや適さないため木製のものには一歩譲る。

粘土板(塑造板)は、多くの現場で用いられているものである。木製の板は吸水性があるため、水分が多く柔らかすぎる粘土をこの板で練ることによって、適度な固さまで調整することが可能である。プラスチック製のものは、撥水性はあるものの、粘土そのものに影響を与えることはなく、机の養生が主目的となる。

その他、水分を適宜与えるための霧吹きや保存のためのビニール袋、容器等が塑造に必要なが、本稿では詳説しない。

3. 子どもの塑造制作

塑造家の制作では、図7. ①のように芯棒を制作し、その後、図7. ②のように芯棒を中心に粘土付けを行い、作品としていくことが多いが、子どもの塑造の場合、芯棒を入れるかどうかは、作りたい物のイメージを保育者が理解してから選択し、支援する必要がある。

芯棒を入れる必要があるものとしては、大型の作品や高さのある作品を制作する場合、また、人や動物など細い脚が胴部を支えるような作品である。



図7. ①芯棒(筆者制作)



②粘土荒付け(筆者制作)

芯棒を必要としないものとしては、小さな作品、そして下方に多くの粘土の量があるピラミッド的な安定感のあるものである。また、ひも状のもので床やテーブル上面に平置きするものにも必要はない。

このように作りたい物によって、芯棒を考えればよいのであるが、芯棒の制作方法を指導者が理解することにより、作るこ

とができるものに幅が出て、それによって子ども達が作りたいものにも広がりが出ることになる。子どもの自主性を尊重した制作のためにも、技法、技術を知っておく必要がある。

次に、子どもがどのような態勢で制作を行うのか考えてみたい。通常、作業机や学習机のような机上で制作を行うことが想定される。その場合、椅子に座って制作することになるが、椅子から立ち上がって、作品に向き合うことがあってよい。また、椅子に座ったままであれば、作品を動かしながら制作することになる。(図8)子どもが集中して制作しやすい態勢や環境の整備を行うためにも、子ども一人ひとりの造形への向き合い方を見つめ、適切な援助を行っていきたい。

これまで塑造について具体的に述べてきたが、次章では、筆者が実際に行った研修会での実践について述べる。



図8. 日展親子鑑賞教室風景

Ⅲ．川崎市保育会での研修

1. 川崎市保育会保育特別対策委員会「造形班」とは

川崎市保育会は、保育会事業案内によれば、昭和 34 年に民間保育園 7 園によって設立されたことにはじまる民間保育園団体で、現在、加盟園 51 園、入所定員総数 5,830 名、職員総数 1,200 名(平成 27 年現在)の一般財団法人である。川崎市と連携しながら、地域の保育需要に応えるため、長時間保育、延長保育、一時保育、夜間保育、休日保育などをはじめ市の保育計画の推進に協力するとともに、乳幼児が心身ともに健やかに成長できる保育内容の提供及び職員の資質の向上を目指し、研修を重ねている団体である。

「造形班」は、この職員の資質向上のための保育特別対策委員会の下にある 4 つの班(「健康班」「音楽班」「食育班」そして「造形班」)の 1 つである。このように造形分野が研修の大きな柱として位置付けられ、各園から 1 名は研修に参加する体制としていることは特筆すべきことであり、川崎市保育会が子どもの自己表現や感性の涵養に力を注いでいることの証左といえよう。

2. 「造形班」での研修内容



図 8. 日展親子鑑賞教室風景

「I. はじめに」で述べたように筆者の幼児造形における塑造の取り組みは、日展におけるワン・デー・アートと親子鑑賞教室に始まる。筆者は 10 年以上にわたってこのワークショップ事業に関わっており、本年度も指導を行ったところである。内容は、芯棒を用いた人体塑造の制作であり、時間の都合もあり、紙粘土による制作を行っている。人体塑造は、人体各部の量、形を理解しながら、それぞれを有機的に関連させながら大きなまとまりを持って制作するものであり、塑造の基本となるものである。幅広い年齢層の子ども(3 歳くらいから中学生まで対象)が対象となっているわけであるが、それぞれの年齢層での理解の範囲で制作を進めるようにしており、テーマとしては難しいあるいは易しすぎるということはなく、みな粘土の感触

を楽しみながら、制作を行っている(図 9)。こうしたワークショップの経験から、授業においても人体の芯棒を応用した塑造による動物の制作などを進めてきた。そして、川崎市保育会保育特別対策委員会「造形班」において、平成 24 年度から本年度までの計 4 回、軽量紙粘土と土粘土による塑造制作をテーマに研修を行っている。これまでの研修内容についてであるが、次の表 1 に示す。

表 1. 過去 4 回の川崎市保育会での研修内容

研修日	テーマ	材料(一人当たり)	参加者数
平成 25 年 2 月 6 日	ペットボトルを芯にした塑造制作・マスコットを作る	ペットボトル: 1 個 軽量紙粘土: 1 個 割りばし: 粘土ペラを自分で制作するため。	54 名
平成 26 年 2 月 7 日	アルミ線を芯にした塑造制作・動物を作る。	アルミ線: 30 cm のもの 2 本 麻紐: 適量 マスキングテープ: 適量 軽量紙粘土: 1 個	57 名
平成 27 年 2 月 16 日	アルミ線を芯にした塑造制作・人体の制作	アルミ線: 50 cm のもの 2 本 麻紐: 適量 マスキングテープ: 適量 軽量紙粘土: 1 個 木の台: 1 個※彫刻を置く台	61 名
平成 27 年 6 月 9 日	土粘土による造形・土粘土を体験する。	土粘土: 1 kg 割りばし: 粘土ペラを自分で制作するため。	64 名

3. 研修の実際

研修では 1 時間の塑造に関する説明の後, 2 時間の実制作を行う。説明については次の 3 点を主としている。

1. 彫塑の歴史
2. 幼児造形における塑造について
3. 粘土についての説明

1 は, 彫塑理解のための知識であり, 保育者の教養として知ってもらいたいものとして説明している。2 については, 「子ども自身の心の働きによって身体が動き, それによって形態が自由自在に変化するものである」こと「感覚, 身体性といったものの喚起」といった点について説明し, 塑造が他の造形表現と比べて特徴があることを説明している。3 については, 粘土という素材についての知識を豊富に持つことのための説明であり, また, どのようなテーマで塑造を行うかによって粘土を使い分けることが, 保育者には求められるからである。まず, これらの説明を行うことにより知識を獲得し, 理解を深めることを目的としている。

次に制作であるが, 平成 24 年度～ 26 年度の研修では以下のような過程で進めた。

1. 軽量紙粘土に触れ, 素材の質感を実感し, 理解する。
2. 動物, 人間の写真を元に作りたいものをイメージし, デッサンする。その際, 正面, 左右の横,

後ろなど様々な角度からデッサンする。

3. 平成 24 年度は、アルミ線による芯棒ではなく、ペットボトルを芯とした制作を行った。

平成 25 年度、26 年度は、アルミ線を芯棒にした作品制作を行った。約 30 cmのアルミ線 2 本を使用し、芯棒を制作する。針金を真半分に折り曲げ、図 19 のように組み合わせる。重なる箇所をマスキングテープで留めてから、図 20 のように麻紐をアルミ線に巻き付けていく。この作業をすることにより、麻紐に粘土が食いつき、しっかりとした造形ができる。

4. 大まかに紙粘土を付けていく。これを荒付けという。

5. 全体のバランスや量に気を付けて粘土付けを行う。

6. 細部を作りながら、全体感を損なわないように粘土を付け、仕上げる。

ここでの制作方法は、大学における塑造制作と内容的にはほとんど変わらない。芯棒が小さいため作品も小型のものとなるが、粘土を大らかに付け、動きが出てくれば、いわゆる動勢のあるダイナミックな作品となる。他方、堅実な粘土付けを行えば、しっかりとした作品となり、見応えのある内容のものとなる。いずれにしてもそれぞれの作品の良さを見出すことが、保育者に求められることであり、制作が終われば、冷静に自他の作品を見つめることが肝要である。なお、平成 24 年度のペットボトルを芯とした塑造制作は、ペットボトルという物理的な量があるため、作品は自ずと安定的な量を持つこととなった。彫刻は量の芸術であり、量感の表現は、制作の主目的の一つであるため、ペットボトルを芯とすることを制約とは捉えずに、むしろ彫刻の本質を捉える課題として、今後とも研究していきたい。

平成 27 年度は、次のような過程で土粘土を用いた塑造制作を行った。

1. 土粘土に触れ、感触を楽しみ、素材の特性を理解する。※ 1 人 1 kgの粘土を使用。

2. おだんごを作る。

3. へびを作る。

4. 塔を作る。

5. 作ったものをまた、一つの粘土にまとめる。※練り方についても指導。

6. 4 本足の動物を作る。

7. 各グループ(6 人から 7 人)で一つのテーマを決め、共同制作する。

8. 出来上がった作品をグループごとに発表する。

土粘土による塑造制作のポイントは、まず感触を楽しむことである。紙粘土とは異なり手にべたつくことは少なく、どちらかといえばサラッとした心地よい感触である。また、適度な重さと抵抗感があるため、暖簾に腕押しのような感じではなく、押したり叩いたりすることによって形態に自分の力をかけたただけの変化が現れる。これによって自分の意志によって制作を行っているという実感が湧く。

今回は芯棒なしの制作において、作品化することを目的としなかった。約2時間という制作時間であったが、発達段階をなぞるように制作を進めることにより、乳児期から4、5歳までの感覚や表現への向き合い方がどのようなものなのか、追体験できたらと考えた。

この研修では、支援の在り方についても検討し、「子ども達の粘土への関わりを肯定的に捉え、共感すること。」「テーマや課題を設定すること(まず、はじめに簡単なテーマを持たせるとスムーズな導入となる)。」「作品化することにこだわらないこと。」「単発ではなく、継続的に粘土を経験させること。」ということを考えていくことを提案した。

参加した保育士の感想では、「粘土造形は子どもの発達段階によって異なり、乳児であればずっと感触だけを楽しんでも良い。形になることに拘らない。また、継続的な経験の積み重ねから作品が生まれてくるかもしれない。出来上がった作品に着目しがちだったが、もっと粘土の持つ可塑性を楽しむ感覚遊びを十分に経験させてあげたいと思った。」というものがあり、土粘土による造形の可能性を実感できる研修になったと考えている。

Ⅳ. 考察

本稿の考察を行うにあたり、これまでの研修参加者の感想をいくつかを取り上げたい。

- ・指先の力加減で粘土をつけた際の形が大きく変わって、考えながら楽しむことができた。
- ・芯棒を使うとしっかり立つものを作ることができると知った。
- ・本質に近づけて作ることの難しさを知り、なかなかイメージ通りに作れず苦戦した。子どもが作品を作る時もイメージ通りにいかないことが多いと思うので、物の素材など知識をつけていこうと思った。一つの物を様々な角度からじっくり見ていくことの難しさと面白さの両方を感じた。子どもたちの興味を引き出せる活動や活動時間について改めて考えていきたい。
- ・子ども一人ひとりが作った作品を大切にしていきたいと改めて思った。

これらの感想から、主として次の3点の理解について読み取ることができる。1つ目は、粘土に関する知識の獲得の必要性への理解、2つ目は、子どもの作品や子どもの作品への思いに対する理解の再認識、3つ目は保育者自身が実際に行って感じた造形への理解、である。保育現場の現状は非常に忙しく、近年は保護者対応をはじめ諸問題に追われることが多いことは周知の事実である。こうした中、参加した多くの保育者から、新しい知識や技術を積極的に獲得しようという保育者の姿勢が見られ、また、自分自身で実践することによって感覚的にも理解することに喜びを見出していることは、子どもの造形を援助していく上で大切なことであると感じている。そして子どもの作品や子どもの作品への思いへの共感や理解へと思いを馳せるに至ったことが、子ど

ものを作りたいという思いを確実に支えることになる。

川崎市保育会「造形班」の4回の研修を通じ、塑造制作を大勢の保育士に経験してもらい、彼らとの会話や感想文から保育現場で実施可能な活動内容であることが示され、造形分野において可能性のある課題であることが理解された。

では、なぜこれまで、保育、幼児教育の現場で、塑造がやや敬遠されてきたのか。それは、どのような課題を設定し、子どもの造形活動に繋げていくのか、また、その意義をどう考えるのか、具体的かつ明確に彫塑分野の専門家から提示されてこなかったことに遠因があるのではと自戒を込めて考えているところである。一方、愛知県瀬戸市には、子どもが自由に大きな量の粘土と触れ合える施設があり、また横浜市立美術館においても塑造のワークショップが行われている。また、研究者レベルでも吉備国際大学の前嶋英輝氏による粘土場⁸⁾があり、塑造への取り組みが少しずつ行われているところである。塑造制作は、ある程度、場所や環境を設定することにより、のびのびと造形を行うことができる。こうした設定は、彫刻家や陶芸家など専門家による提案・協力は不可欠である。今後、このような活動に注視しながら、より充実した塑造活動を行える環境作りについても研究していく必要がある。

V. まとめ

今回の保育会での4回の研修を通じて、大きな成果があったことは、「造形班」の研究発表のテーマとしてこの塑造制作が選ばれ、保育会所属の多くの保育士によって子どもに塑造経験をしてもらおうという試みが行われたことである。そしてこうした活動を彼ら自身が研究としてまとめたことに意義があると考えられる。発表は「自然とのふれあいから育つ豊かな発想～楽しくつくり、夢が広がる粘土遊び～」と題して、「造形班」に所属する長寿保育園の鈴木啓子氏、小畑敦子氏によって行われた。本研究は「造形班」を担当されている各園の園長をはじめ指導的役割の保育士によって繰り返しミーティングが行われ、研究の精度を高めてきた。殊に研究にあたって各園で粘土による造形制作を実際に行ったところに意味があり、土粘土に挑戦した保育園も16園を数えた。発表では研究のまとめとして次の4点が挙げられているので、紹介したい。

- ①自然の素材とのふれあいを通して、自然を感じ、子どもたちの「やってみたい」という意欲を大切にすることで、つくる楽しさや達成感を味わうことができた。
- ②造形活動を通して、保育士と子ども、子ども同士の信頼関係を深めることができた。
- ③環境とかかわりの工夫によって、造形意欲や表現力を高めることができた。
- ④造形活動のプロセスを大切にすることは、その子のありのままを受け止め、寄り添いながら、個性を引き出すことである。

この4点のまとめは、子どもの塑造制作の実践から得られたものであり、重要な示唆に富んだ内容となっている。粘土は直接触れることによって造形されるものであり、自分の意志がただちに反映される素材であることは先にも述べた通りである。子どもの意欲や思いが、形となって表れているという現実に対して、保育士がそのありのままを受け止めることが大切であるということ。そして、受け止めることによって子どもの表現、個性を伸長させていくのだという理解がここで示された訳である。そしてこの「受け止め」「寄り添い」というものは、子どもへの「共感」「共鳴」があるからこそであり、実体のある塑造は、量感のもつ彫刻的な感動を呼び起こし、「共感」「共鳴」が深いものとなっていると推察される。こうしたまとめが現場の中から出てきたことは、子どもの造形における塑造制作が、造形の本質的な意義を持つということと、課題として実行可能な活動であることが、保育者自身の言葉によって示されたといえよう。

塑造家としての立場、そして保育者を養成する教員の立場から粘土という素材を考えると、土粘土の持つ素材の優れた特性を保育者に理解してもらい、子どもたちに触れてもらいたいと願っている。土粘土は文字通り土そのもので出来ているため自然物である。精製されたものとはいえず生の土に触れる経験であり、恐らく人間のもっとも根源的な体験なのではないだろうか。触れる感覚、皮膚から伝わる感覚を、粘土の体験を通じて楽しみながら脳と身体で理解していくことが、外遊びの少なくなった現代の子ども達には、必要なことなのではないだろうか。子ども達に人間としての原初の体験を提供できるもの、それが土粘土による塑造であり、クリエイションの原点となると考えている。

今後の課題として、年齢別の塑造制作の内容と方法を構築すること、また、現在の子どもの実態に即した活動のメソッドを研究していくことが挙げられる。そのためにも、子どもの具体的な塑造体験を様々な角度から見つめることにより、造形表現に繋がる援助の仕方を考察していく必要がある。なお、本研究の②として、地域の保育者やグループと連携し、実践的にこれらの課題に取り組むことにより得られた知見について述べたいと考えている。

注及び参考文献

- 1) One Day Art(ワン・デー・アート)とは、公益社団法人主催の夏季に行われる幼児・児童・生徒向けのワークショップで、日展出品作家による制作指導が行われる。日本画、洋画、彫刻、工芸、書道の5科があり、筆者は彫刻を担当している。
- 2) 親子鑑賞教室とは、公益社団法人日展主催で、日展会期中(国立新美術館での)に3回行われる子どもと保護者のための鑑賞教室。ここでは、簡単な彫刻制作を行ってから、展覧会場で彫刻作品を鑑賞している。
- 3) 厚生労働省『保育所保育指針』第3章保育の内容 (2)教育にかかわるねらい及び内容 オ 表現 2008年改訂,2009年施行 文部科学省『幼稚園教育要領』第2章ねらい及び内容 表現 2008年改訂,2009年施行
- 4) 中村傳三郎『明治の彫塑』文彩社,1991

- 5) 木節粘土とは、瀬戸，多治見を中心に産する陶土。粘土層に炭化した木片を含むので，土の色が暗褐色や灰色である。
- 6) 蛙目粘土とは，粘土に石英が混入し，濡れると蛙の目が光っているように見えることから名付けられたという。木節粘土の次に可塑性があり，色は白色である。
- 7) 新海竹太郎(1868～1927)とは，近代日本最初期の彫刻家で，当初，馬の彫刻家として知られた後藤貞行に師事，後にベルリンに留学し，ベルリン美術学校彫刻主任教授ヘルテルに塑造を学ぶ。代表作「ゆあみ」
- 8) 粘土場とは，吉備国際大学准教授前嶋英輝氏によって高梁中央保育園に設置された粘土の遊び場のこと。

図版出典

図1. 飛鳥園撮影

図2～図9 筆者撮影

謝辞

本稿の作成にあたっては，一般財団法人川崎市保育会特別対策委員会「造形班」にご高配頂き，研究発表に関する資料のご提供を頂きました。「造形班」をご担当されている社会福祉法人多摩福祉会多摩保育園園長 奥村佳代子先生，そして社会福祉法人鈴保福祉会柿生保育園園長 奥水邦夫先生にはご理解とお力添えを頂きましたことを，ここに記して感謝の念を表するものであります。